

〔報告〕

外国語教育の新しい可能性と 根底にあるべきもの

—「語学ラボラトリー学会(LLA)第35回
全国研究大会」参加報告を兼ねて—

内 田 慶 市

「語学ラボラトリー学会(LLA)第35回全国研究大会」が1995年7月22日から7月24日にかけて中京大学名古屋学舎で開かれ、内田および室員の近藤、鈴木の3名が参加した。

22日はワークショップ、ニューメディアセミナーということで、賛助メーカーによる語学機器、CD-ROMなどの語学教材の展示、デモが行われた。

23日は開会式と基調講演の後、キーワード講座、研究発表、実践報告が各会場に分かれて行われ、24日はテーマ別分科会、シンポジウムが行われて幕を閉じた。

今回のテーマは「外国語教育の新たな可能性と課題」ということであったが、「情報ハイウェイ」に象徴される最近の状況を反映して、「インターネット」を利用した語学教育、CD-ROMやCALL、CAIを使いたいいわゆるマルチメディア語学教育に関する発表、報告が多かったように思われる。

特に、中部大学の尾関修治氏らのグループによる「インターネットを利用した英語コミュニケーション活動」の報告は、これからの語学教育の「一つの」新しい可能性を示したものと注目される。もちろん、この場合、現段階ではあくまでWriting、Readingが中心で、ListeningやSpeakingについては将来の課題であろう(Listeningについては現在でもある程度まで可能である)が、E-MailやMailing List、Net Newsへの投稿といった方法を用いた英語教育は、新鮮で、かなりの学習効果を上げることが期待されるものである。実際、アンケート結果を見ても、学生の動機付け、積極性を引き出すという点、また一度に多くの人に読まれ、それからの反応(コ

メント)をもらえることで、英語力の向上とともにコミュニケーションが深まるとかいうように多くの面で効果を挙げているようである。ただ、これを行う場合、たとえばMailing ListやNews Groupへの投稿という場合、これまでのようなクラス単位、あるいは所定の授業時間という枠が取り払われることになるわけで、教員のチームワークや、なによりも「いつでもコンピュータが使える」という環境設備の問題などが浮かび上がってくる。ただ、設備については、尾関氏が「はじめに学生分の機械(コンピュータ)がなければ何もできないということではなく、すでにあるものだけでも先ずやれるのである。中部大学では現在インターネットにつながっているコンピュータは7台しかないが、それでもやろうと思えばやれる」と発言されていたことが印象的であった。我が関西大学には中部大学以上のコンピュータが設置されている。もちろん、まだまだ不十分ではあるが、7台よりは確かに多い数であろう。しかし、他大学に比べてそれが「生かされて」いるかどうか検討してみる必要はないだろうか?すでに多くの大学(のみならず、小・中校でもすでに100校以上にのぼる)では学生がインターネットを利用し、世界に向けて「発信」し続けているのである。なお、E-MailやNews Group以外にも、WWWのVirtual Realityの世界でのOnline Communication(パソコン通信でのChatをより高度にした感じ)を利用した語学教育も今後は考えられていだろう。

ところで、LLとかCD-ROMあるいはCALL、CAIといったコンピュータなどの「機器」を利用した新しい外国語教育の可能性や、コミュニケーション能力を高める教育に関する報告が主流を占める中、一方で戸田正直氏による基調講演「コミュニケーションと認知科学」やテーマ別分科会の一つの「異文化理解のための外国語教育」は、このような新しい状況下でも「語学教育で忘れてはならないこと」「根底にあるべきもの」を改めて喚起させるものであった。